9 病棟勉強会

（1）平成 20 年 2 月 23 日　「相互理解のために」　―体験学習―
対人コミュニケーションのあり方　藤岡　悦子

（2）平成 20 年 5 月 20 日　「看護必要度について」
研修会報告　鎌田　恵

腎瘻カテーテル挿入患者の生活に不安をもたらす要因

大館市立総合病院　９病棟

石田　恵

keyward：不安．ボディイメージの変調．行動制限

Ⅰ．はじめに

腎瘻カテーテル（以下、腎瘻）を挿入された患者は、生来の排泄機構とは異なる形で退院し、在宅で生活していく。退院時に患者から「本当に管を入れたまま生活できるだろうか」という不安の声を聞く機会があった。腎瘻を挿入して日常生活を送らなければならない患者は、さらに何らかの不安を抱えながら生活しているのではないかと考えた。そこで、本研究は腎瘻挿入患者の日常生活に不安をもたらす因子を探り、今後のサポート確立を目的とする。

Ⅱ．研究方法

１．対象者：腎瘻を挿入し、在宅で自己管理している患者。

表１．患者の属性　男性２名、女性３名(平均年齢 60 歳)

	A	B	C	D	E
性別	女	女	男	男	女
年齢	59 歳	60 歳	56 歳	53 歳	72 歳
己管理歴	３ヵ月	12 年	2 ヵ月	5 ヵ月	一週間
疾患名	子宮癌	子宮癌	尿管結石	直腸癌	大腸癌

２．期間：平成 19 年７月～平成 20 年１月。

３．データの収集及び分析方法：独自のインタビューガイドを用いて、一人 30～40 分程度半構造化面接を実施し、腎瘻が挿入されたことによる不安を自由に語ってもらう。得られた内容を逐語化し、類似する記述内容を不安因子とした。それを分類、コード化し、Krippendolf に準拠した内容分析を行った。また、信頼性・妥当性の確保のために、複数の合議のもと合致する因子だけとし、スーパーバイザーの指導を得た。

４．倫理的配慮：研究の目的・方法等を説明し、参加協力は自由意志で行われること、プライバシーの保護に努めること、情報漏洩に十分配慮することなどを書き示した書類を提示し、同意書に署名を得た上で面接を行った。

Ⅲ．結果

面接内容の分析結果から、(ボディイメージの変調)（カテーテルトラブル）(自己管理の継続)（予後）のカテゴリーが抽出された。以後、カテゴリーは（）、サブカテゴリーは〈〉、口述内容は「」で表記する。

腎瘻挿入患者が生活する上で、最も多かった不安は（ボディイメージの変調）であった。「パンツスタイルだと目立つ」など〈外観の変化〉や、「自分に分からなくても、他の人には臭いがしているのではないかと思ってしまう」など〈臭い〉に関する因子があげられた。他に「管のある今の生活に馴染めない」など〈拘束感〉があげられた。次いで多かった因子は、(カテーテルトラブル）であった。「寝ている時に抜けてしまいそう」などの〈抜去の心配〉が最も多かった。今回の研究では５人中２人が抜去の経験があった。また、「バイ菌が入りそうで入浴は不安」など〈感染の恐れ〉があげられた。次に「退院後の生活について説明はあまりなかった」など〈サポート不足〉、「治療の副作用で手が痺れて思うように管理できない」〈健康障害〉、「病院と違い、家だと設備が整ってないから不便」の〈環境の不整備〉による（自己管理の継続）の不安があげられた。「あと何年生きられるかな」などの〈死への恐怖〉、「生きるって大変ね。ここまでして生きなければならないかって思う」など〈治療継続の苦痛〉からなる（予後）があげられた。

Ⅳ．考察

腎瘻挿入患者は生来とは異なる排泄機構となるため、常時蓄尿袋を装着しなければならない。そのため〈外観の変化〉〈臭い〉を常に気にしており、〈拘束感〉は大きいと考えられる。中村[1]は、「患者の身体の延長上にドレーン・チューブがあり、つながれているという感覚から、拘束感や行動面においても心理的に制限が生じやすい」と述べている。今までの排尿機構が変更され、体のボディイメージが変調されるという喪失感は計り知れないと思われる。また、腎臓に直接カテーテルという異物が常に留置されていることで、〈抜去の心配〉〈感染の恐れ〉など（カテーテルトラブル）が不安をもたらすと考えられる。そして、(自己管理の継続）では、患者本人の〈健康障害〉や、医療者側の〈サポート不足〉、そして腎瘻挿入して間もない患者から、環境が整っていないために病院と在宅との管理の違いについて戸惑ったという〈環境の不整備〉の声が聞かれた。足立ら[2]は「看護師は、患者の現在の状況だけではなく、退院後を想定した退院指導を計画しなければならない。また個々のニーズに合わせた介入を行わなければならない。これが、患者の問題意識と退院指導の自覚を生み、より有効な退院指導の成立につながる」としている。現在の症状や、病院での管理だけに目を向けるのではなく、入院時から在宅での生活についてアセスメントし、退院後の生活スタイルに合わせた個々の指導が必要である。そして、対象者のほとんどが悪性疾患であり、その全員が（予後）に対する不安を抱いていた。腎瘻挿入というのは排尿障害を回避するための手段であり、疾患は治癒したわけではない。そのため、常に〈死への恐怖〉〈治療継続の苦痛〉を持ちながら腎瘻の管理をしている。よって、(予後）が日常生活に多大な影響を及ぼしていると考えられる。

Ⅴ．結論

１．腎瘻挿入患者の生活に不安をもたらす要因としてボディイメージの変調、カテーテルトラブル、自己管理の継続、予後の４つが抽出された。

２．患者の不安が少しでも軽減するよう、入院時から在宅での生活に目を向けた個々に対する指導が重要である。

Ⅵ．引用文献

１)永井秀雄編著，中村美鈴：見てわかるドレーン＆チューブ管理，Gakken，19-20，2006.

２)足立登志子，竹林利江子，小巻正泰他：看護師の退院に対する意識と有効な退院指導成立に対する検討，第 32 回地域看護，97-99，2001.